

短報

# 「里山看護」を理解するための思想的基盤

井村俊義

長野県看護大学

長野県看護大学紀要

第22巻別刷

2020年3月

## 「里山看護」を理解するための思想的基盤

井村俊義

**【要 旨】** 近代的な看護を補完する役割を果たす「里山看護」の思想的基盤について、その基本的な考え方や実践に向けての方向性、そこから派生する問題などについて述べた。テーマの性格上、取り組むべき課題は多岐にわたるが、この論考ではおもに、里山看護を考察するために必要な感覚や感性の持ち方の重要性、その媒体となる「言葉」などの役割について論じた。これらの事実を通して、近代社会を覆っている近代的発想の陥穽を明らかにし、医学よりも幅広い視点をもつ看護学が備えるべき思想と可能性について論じた。また、生活のあらゆる面において看護は影響力をもち、したがって、里山看護も既存の枠にとらわれずに考察できることを示した。その際に、鈴木大拙、今西錦司、パトリシア・ベナーらの思想を援用して解説を行った。

**【キーワード】** (前) 近代, 自然, 言語, 二項対立, 感覚

### はじめに

「里山看護」という新しい概念が提唱されてから十数年が経つが、いまだその内実は十分に理解されているとは言いがたい。その理由は、主として、里山看護が近代看護とは異なる発想と思想的基盤によって構築されていることが大きい。すでに私たちの生活に慣れ親しんだ「近代看護」がじつは、西洋という「限られた地域」の、さらに「限られた時期」に成立したものにすぎないことをあらためて念頭におく必要がある。

看護の分野に限らないが、このような近代的な発想と達成は、私たちがこれまで長い時間をかけて培ってきた文化に接ぎ木をするように広まっていった。その結果、私たちは、欧米諸国と伍していくことができるようになった、という肯定的な面が強調されがちである。

しかし、現代の健康にまつわる状況を振り返ってみ

ても、病気は根絶されることはなく、医師や看護師の数も減ることはない。近代的発想は人間が抱える問題を根本的に解決することはできず、むしろある面で肥大化させているのではないかという疑念は消えない。このような近代の陥穽が指摘され見直される潮流に、里山看護の果たすべき役割は位置づけられる。

したがって、共有すべき里山看護の「思想的基盤」は、西洋近代によって進められてきた社会とはそぐわずに、そこから取り残されてしまった諸要素の価値を認め、それらを現代にふたたび取り戻すところにある。この論考ではそれらについて、おもに、鈴木大拙、今西錦司、パトリシア・ベナーらの思想を参照しながら解説を行っていく。

### 1. 里山看護を考えるための入り口

私たちの生活のあらゆる面で近代性はすでに浸透し

ており、そのため、そのアンチテーゼもまたきわめて多様な入り口を有している。「近代」自体の定義は論者によってさまざまではあるが、里山看護に引き寄せて述べるならば、市民革命や産業革命を乗り越えたうえでの「西洋科学による合理性の重視」、および、国民国家の形成にともなう「地方から都市への人口の移動」という側面をあげることができる。

「西洋科学による合理性」は、人が何かを理解するために仮に設定された数値や基準を思考の中心におくようになったことを示し、それに当てはまらないものを考察の対象から外すという結果を生んだ。しかし、里山看護では、人工的に設定された数値や基準をあらためて問い直そうとする。なぜなら、理解のために作られた枠組みから外れてしまったものにも、なんらかの「意味」があると捉えるからである。

このような「合理性の重視」とともに、近代を定義した二つ目の項目である「地方から都市への人々の移住」はすなわち、資本主義の発展とともに人々は都会へと集まり、土地土地に根づいていた知恵が徐々に忘却されていく過程をさす。国民国家の成立によって、国家全体の利益に資するよう国民は画一的に「教育」され、それにしたがって学問のカリキュラムは設計された。私たちは国家から目標を設定され、それに乗り遅れぬよう努力を重ねているが、そのような知識の中身には言うまでもなく、土地に根づいた時間の体積としての「叡智」はもはや存在しない。それを取り戻そうとすることが里山看護のひとつの目的である。

ここであらためて、「里山看護」を提唱した北山秋雄現長野県看護大学学長の言葉を借りて「里山看護」を説明するならば、「里山」とは「人間と自然が共存する地域」であり、そこをフィールドとして培われる看護が「里山看護」である。さらに「里山」から看護を発信する必要性についてのおもな理由は、近代社会を規定している欧米由来の思想が、これまで「自然」を人間社会とは異なるものとして客観視し、ときに敵対して駆逐するような視点によって発展してきた事実を相対化するためである。「自然」に宿っている知恵を取り出すことが、里山看護の中心的な目的であると言えるだろう。

土地土地に営々と築かれてきたヴァナキュラーな看

護の知恵はほぼ等閑視されてきたという認識のもと、私はかつて、北山の意見を取り入れながら「里山看護」の内実とそれが目指すべき目標を次のように定義したことがある（井村、2019）。

里山で培われた「知恵」を、従来の「地域看護」の知見と照らし合わせながら、さらに新たな視点を含ませ、そこから生まれる知的財産を「都市」をも含めた各地域へと還元していく。

近代看護の枠組みのなかで発展してきた「地域看護」という言葉をそこに含ませた理由は、里山看護の行く先がただ前近代へと先祖返りすることにはないことを意図している。前近代と近代という「二項対立」のどちらかに振れるのではなく、そのような構図自体を否定することは、里山看護を考える際のもっとも重要な視点のひとつである。「二項対立」を維持して葛藤を放置するのではなく、止揚するべく新たなパラダイムを提示することを目指しているからである。

北山はこれに関して、その思想的な背景として仏教学者の鈴木大拙をあげている。西洋がもたらした二項対立の思考方法をとらない大拙とこの点で彼は認識を共有していると言える。鈴木（1987）は次のように書いている。

禅によれば、事実そのものの中には何の葛藤もない。有限と無限の葛藤もなく、肉と霊の葛藤もない。これらは、知性がおのれの興味のためにかりに作り出した無意味な区別にすぎない。

「知性」を経由して理解することで「善悪」「正邪」などに分けてしまう思考方法を大拙がとらないように、北山もまた感覚的な未分化の状態を基本的な感性として携えている。鈴木はさらに「禅は、自己の体験の事実直接訴えてこれを解決しようとして、書物の知識にはよらない。人間自身の存在は、まさしく有限と無限との間のはげしい葛藤の場であるが、その本性は、知性よりもさらに高い力によって把握されねばならぬ」とも述べている。

人は「自然」がもたらす「ものごと」を理解するた

めに、人工的に作り出した二項対立のような仮の方法を利用した。しかし、私たちは次第に、それが自然界にもともと存在していたものと勘違いし、やがて、その認識が私たち自身の思考を規制し始める。その過程で「現実」が見えなくなっていく。禅も里山看護もそのような基本的認識のなかにある。

その対処法として、既存のパラダイムをそのままにして「道具（言葉）」を並べ替えて解決するのではなく、人工的に設定された境界線を取り外して、哲学的な意味での「まなざし」と「感性」を捉え直すのである。鈴木（2010）は、代表的な著作である『日本的靈性』において「精神は分別意識を基礎としているが、靈性は無分別智である」と書いている。ここでいう「靈性」とは、ナイチンゲールが『思考のための提言』で「スピリチュアリズム（神秘主義）」(Nightingale, 1860)と書いたものと同じである。ナイチンゲールが亡くなってすぐに出版されたエドワード・クック（1994）の伝記『ナイチンゲール：その生涯と思想』には、彼女がスクタリから戻ってきてからもずっと神秘主義に傾倒する様子が描かれている。クックは「プラトンを研究することによって、キリスト教の神秘主義に対するフローレンスの関心は増した」と書き、なかでも『パイドロス』に彼女が傾倒したと記されている。

プラトン（2018）の『パイドロス』が示す哲学的叡智の白眉である「文字に対する欺瞞性」については、たとえば、以下のような記述がある。

これ（文字：筆者註）を学んだ者たちの魂の中にまず第一に忘却を与えるだろう。記憶しようとしなくなるのだ。なぜなら、書かれたものを信用することによって、その者たちは自分たち自身の力で内から思い出すのではなく、他人の刻印したものによって外から思い出そうとするからだ（中略）これを学んだ者たちにおまえが与えるのは、知恵の思いなしであって、本当の知恵ではない（中略）知恵のある者ではなく、知恵があると思う者になってしまうのだ。

禅においてもまた「文字」は、もはや現実を体現するものではなく情報にすぎないとして「不立文字」と呼ばれる。この姿勢をプラトンも共有していたことが

わかる。そして目に見えないものを重視していたナイチンゲールもまた、同様の考え方を有していた。ここにおいて、里山看護とともに、禅やギリシア哲学、ナイチンゲールの思想を同じ俎上にあげて論じる契機を得ることができる。

## 2. 実践していくための方法と態度

前近代の知恵が多くの場合、言語という媒体に乗せることができない感覚的な内容であったとしても、各地域へと還元するためには「言葉」に変換する必要がある。場合によっては、その「言葉」はレトリックを駆使した韻文として表現されるであろうし、あるいは、もっと広い意味でのメディアである、音楽や絵画や彫刻や建築や「モノ自体」などの媒体を含ませることにもなる。言葉に還元不可能な「感情」を他の媒体を通して表現しようとしてきた人類の長い歴史を鑑みるならば、それぞれのメディウムを使用することこそ里山看護にふさわしいと言える。

「モノ自体」について説明を加えるならば、「物質」そのものがもつメッセージ性であり、実質性である。たとえば、信州にも多数存在する「産直」を利用した独自の「地場野菜」や、それを取り入れた「料理（弁当）」を通して「健康」を考えるようなアプローチであり、「料理」自体が里山看護を考える方法となる。里山看護は私たちがすでに忘却してしまったモノ（思考以外のすべてを含む）に付随する「思い」や「感覚」までもを取り入れるのである。

かつて「必要性をもって存在した」物質、感情、物語、儀式などは、人々の「健康」にどのように寄与してきたのかを近代看護は十分には研究しようとはしてこなかった面がある。里山看護はそこに目を向けて探求し、現代の看護に還元しようとする。近代以降に確立された社会によって駆逐されてしまった古の生活のすべてに目を向け、有用な知識や感情を取り出そうとするのである。文字の集合体が事実と遊離した情報の集積体になってはいけけない、ということである。文字の組み合わせはけっして学問の発展とは関係なく、いかなるときも「どうすれば現実をさらに反映させることができるのか」「どうすればこの状況をさらに改善させることができるのか」、そして「それらをどのように伝え

ることができるのか」に目を向ける。私たちの環境を取り巻き、影響を与え続ける「自然」のもたらす「作用」を、学問にいかに取り込むかに意義を見出すのである。

里山看護を深めるにおいて参照すべき人物に、生態学者の今西錦司がいる。今西は、自然と人間が共棲している場を「半自然」と呼んでいるように、里山看護の発想ときわめて近いところにいる。言葉になる以前の「直観」を重視し、自然を直に観ようとした点も同じである。今西と里山看護との接点をさらに探るならば、彼は進化論がもたらす「人間を頂点とするような考え方」を取らなかった。進化を下等動物が「突然変異」と「適者生存」の過程で徐々にヒトへと近づいていくという一般的な考え方を否定し、「棲み分けの密度が高くなることである」と今西（1995）は述べている。さらに、今西（1972）は生物間に優劣をつけないどころか「私は無生物には無生物的生命を認めて少しもさしつかえないことと知っている」とさえ述べている。生物と物質との間に差を作らないという発想と同様、土地と土地との間に優劣をつけ、やがて必然的にすべてが都会になっていく、という近代的発想とも無縁である。里山は都会に駆逐されるのではなく、時を経るごとにその独自性の価値を増してゆく、ということになる。一方、ダーウィンの考えに則れば、里山はいずれ都市に吸収されることになるだろうが、今西はそう考えないのである。

人々の「集団意識」においても、西洋との違いを意識するよう彼は指摘している（今西、1995）。

国家はわれわれの上に大きな網をかぶせているかもしれないけれども、個々の人間はもっと小さな集団で生きているんです。たとえば日本の村というのは、明治以降に統一しましたけれども、その原型というか、村に統一される前の自然村というものは、典型的な地域共同体で、長年の経験を生かして非常にまとまりのいいものだった。

ここで述べられた「小さな集団」「自然村」「地域共同体」を「里山」とおきかえることもできるだろう。今西の思想は実際、批判されることも多いが、それはおそらく、近代的発想が是とされていた時代とはそぐわ

ない考え方だったからであると推察できる。

### 3. 近代看護からの射程

「近代看護」の領域において、里山看護と同様の発想を掲げる看護学者のひとりにパトリシア・ベナーがいる。たとえば、彼女は「暗黙知」を提唱したマイケル・ポランニーを引用して「知覚的な認識は、観念的な認識に先行する」と述べている。「観念的な認識」とは、体系化や説明化や合理化を目指す知識であり、「知覚的な認識」とは、「直観」を含めた感覚である。既存の技術と観念を鍛えるという従来の方法のみによっては達成できないことがある、とベナーは考えていることがわかる。看護師が規則的な思考と行動に終始するならば、看護という職業はテクノロジーに容易に代替される可能性がある。それを乗り越えるために持ち出された概念が「暗黙知」である。ベナー（2005）は次のように述べている。

ポランニーは、この知的情熱の役割と、熟練した人間の問題解決の潜在的な側面を説得力のある形で語っている。知覚的な認識は、観念的な認識に先行する。たとえば、看護師は、心電図や血圧の変化などの明瞭なバイタルサインでそれが明らかになる前に、患者の表情から、総合的で微妙な変化を見分ける達人になる。

初心者から達人への道をベナーは強靱な思考力とともに明確に定めている。欧米が長い時間をかけて蓄積してきた近代の知を、ベナーは十分に咀嚼してこのような境地にたどり着いた。このことに関して、私たちは里山看護を語る際に避けられない、西洋が獲得した「近代」自体についても再考しなければならない。わが国において、「近代の超克」となんども議論されつつも、おもに西洋に追いつくべく目標に据えてきた近代の「成果」のみに着目してきたのではないか、という問題である。そうだとするならば、じつは私たちにとっては「超克すべき近代」などというものは存在せず、「近代」自体が孕む問題を討議するよりもまず、私たちのたどり着いた場所は果たしてどのような場所なのかという問いから始めなければならない。いわゆる「擬似近代性」の問題である。近代を速やかに輸入

するために、時間をかけて蓄積されてきた歴史を振り返ることなく、ただ近代を都合よく利用してきた面があるのではないかと、ということである。

「近代看護」もまた、欧米が呪術的・宗教的な治療方法を「啓蒙」してきた結果として存在していることを忘れてはならない。私たちは、近代看護のなかに、歴史の堆積としていまだ内を含んでいる「非科学的な側面」を捨象して受容している面がある。その結果、日本における近代看護は純粋に技術的な、思想をとまなわなない「反復作業」となってしまったのではないだろうか。そう考えるならば、日本が摂取した看護技術の大半は、やがてテクノロジーに凌駕される可能性が高いと予測できる。

機械ではなく人間にしか行うことができない領域を探索しようとする里山看護は、日本に近代看護が導入され始めた時期に行われた「医療伝導の遂行」（亀山、1993）や、第二次世界大戦後のGHQがもたらしたキリスト教の影響なども考えるべきテーマとして取りあげることになる。つまり、宗教や信仰のもつ健康への影響も視野に入れ、キリスト教思想とともに輸入された近代看護をその歴史も含めて捉え直す。近代看護がもともと抱えている宗教的側面を明らかにすることによって、それとは馴染まなかった「知恵」が捨てられてしまった隠された歴史に対しても光を当てるのである。

### おわりに

看護歴史学者のシオバン・ネルソン（2006）はベナーの考え方を詳説する論文で次のように書いている。

人間科学（看護も含まれる：筆者註）は自然科学とのあいだに二元論的な対立関係があるとベナーは考えている。道徳的実践を行う看護においては、医学による実利的な理由によってもたらされる影響から患者を守る役割を果たすと考えられる。

私が「守る」と訳した部分は「緩衝剤となって衝撃を和らげる」という語義の「buffer」である。つまり看護師は、患者に向けられる医師からの行為との間に立って「緩衝剤」とならなければならない、とベナー

およびネルソンは促しているわけである。近代医学に組み込まれてしまった近代看護が分業しすぎていることに警鐘を鳴らし、患者の視点に立とうとするこのような立ち位置を、里山看護もまた目指していく必要がある。

何らかの価値観をもって私たちは目の前にあるものを判断しており、人が自然を駆逐して飼育慣らす前にさかのぼるためには、身体知としての感性を取り戻すことが求められている。それを考えるためのヒントは今回取りあげた方法以外にも無数にある。たとえば、「詩」を含めた文学は、それを考えるための多くの示唆を含んでいる。最後に、文芸評論家の小林秀雄（1962）の言葉を掲げて終わりとしたい。

子供は母親から海は青いものだと教えられる。この子供が品川の海を写生しようとして、眼前の海の色を見た時、それが青くもない赤くもない事を感じて、愕然として、色鉛筆を投げだしたとしたら彼は天才だ（中略）言葉の実践的公共性に、論理の公共性を付加することによって子供は大人となる。この言葉の二重の公共性を拒絶する事が詩人の実践の前提となるのである。

里山看護は、「言葉の二重の公共性を拒絶」して、詩人のような感性を通して新たな言葉を手に入れ、それを携えながら患者に寄り添い、実践に向かう看護師を理想とするものである。

### 文 献

- ベナー パトリシア（2005）. 井部俊子監訳, ベナー 看護論新訳版—初心者から達人へ, 医学書院, 東京.
- クック エドワード（1994/1914）. 中村妙子・友枝久美子訳, ナイチンゲール—その生涯と思想, 時空出版, 東京.
- 今西錦司（1972）. 生物の世界. 講談社, 東京.
- 今西錦司/吉本隆明（1995）. ダーウィンを超えて. 中央公論社, 東京.
- 亀山美知子（1993）. 新版看護学全書別巻7巻 看護史. メヂカルフレンド社, 東京.
- 小林秀雄（1962）. Xへの手紙・私小説論. 新潮社, 東京.

- 井村俊義 (2019). 超看護のすすめ—ナイチンゲールの復権とケアの哲学. コトニ社, 千葉.
- Nightingale Florence (1860/1994). Suggestions for Thought by Florence Nightingale: Selections and Commentaries. Edited by Michael D. Calabria and Janet A. Macrae. U of Pennsylvania P, Philadelphia.
- Nelson Sioban and Gordon Suzanne (2006). The Complexities of Care: Nursing Reconsidered. ILR Press, Ithaka.
- プラトン (2018). 脇條靖弘訳, パイドロス, 京都大学学術出版会, 京都.
- 鈴木大拙 (2010). 日本の靈性. 角川書店. 東京.
- 鈴木大拙 (1987/1965). 工藤澄子訳, 禪, 筑摩書房, 東京.

---

井村俊義  
〒399-4117  
長野県駒ヶ根市赤穂1694番地  
長野県看護大学  
Tel: 0265-81-5139 Fax: 0265-81-5139  
E-mail: imura@nagano-nurs.ac.jp  
Toshiyoshi IMURA  
Nagano Prefecture  
Nagano College of Nursing  
1694Akaho,Komagane,Nagano,399-4117 JAPAN  
Tel: +81-265-81-5139 Fax: +81-265-81-5139  
E-mail: imura@nagano-nurs.ac.jp